

UICP Booklet 13

共生の哲学のために

Toward a Philosophy of Co-existence

目次

序

共生の哲学のために

中島隆博 ————— 5

1

「新しい人」に向かって 人類の共生の地平

小林康夫 ————— 11

2

作為共生理念之基礎價値的荀子「禮」概念

佐藤將之 ————— 23

3

否定政治學與共生哲學 西田幾多郎與新儒家

中島隆博 ————— 41

4

人類・歴史・共生 21世紀における「歴史学の課題」

パネリスト：羽田正＋橋本毅彦＋中島隆博＋小林康夫(司会)

ディスカッサント：信原幸弘＋原和之＋村松真理子

————— 61

5

ISLAM Image and Realities

Karim Douglas CROW _____ 101

6

Être responsable de tout face à la crise de
la pensée de l'homme

Yasuo KOBAYASHI _____ 145

7

グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」

「共生」への取り組み _____ 149

序

共生の哲学のために

中島隆博

UTCP

東京大学グローバル COE プログラム「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)は、2007年9月の発足以来、「共生」概念を問い続けてきた。その幕開けは、2007年10月21日のUTCP オープニング・シンポジウム「いま、共生の地平を問う」であった。このオープニング・シンポジウムの後、UTCPは国内外において夥しい数の活動を展開してきたが、そのすべてが「共生」概念をたえず問い続けてきたと言っても過言ではない。その中から、「共生」概念の定義に深く関わった活動を選んだものが、このブックレットである。

第1部では、「共生」と「共生哲学」を正面から問い直した三篇の論文を、台湾シンポジウムから取り上げた。UTCPは、2009年3月28日～29日にかけて、台湾大学哲学系と中央研究院の全面協力のもと、台湾大学において国際シンポジウム「東西哲学の伝統における「共生哲学」構築の試み」を開催した。このシンポジウムは、「共生」概念と「共生哲学」概念の定義づけを、台湾という歴史的にも社会的にも複雑な空間において、実践的に行おうとしたものである。台湾は、政治的・文化的に大陸中国といかにして「共生」するかを日々問い続けているが、それだけではなく、民主化以降、それまで抑えつけられてきた少数民族問題や女性問題というエスニ

シティーやジェンダーに関わる議論と、外省人と本省人の関係をどうするのかという議論が澎湃として出現した点で、日本以上に「共生」に敏感な場所である。加えて、日本による植民地支配という歴史的な記憶が台湾と日本の間にはあるために、「共生」概念を哲学的に練り上げるには最もふさわしい場所である。

シンポジウムの基調講演として、小林康夫 (UTCP) は「「新しい人」に向かって——人類の共生の地平」を報告した。それは、グローバリゼーションの今日、わたしたち「人類」がついに「一つの歴史」の中に存在する事態が出来たことの意味を考究したものである。すなわち、近代西欧哲学は歴史の主体として「人間」を措定してきたが、その「人間」は自らの内在性に根拠を有するものであった。しかし、わたしたちはもはやそのような存在形式に依って立つことはできない。なぜなら、わたしたちは「人類」として他人と「共生」しているだけでなく、他の生物という他者とも「共生」しており、それに見合った存在形式を定義しなければならないからだ。この「共生」の存在形式を、小林は「存在のエコロジー」と呼び、「共生の哲学」が思考すべき問題だと言う。そして、その際、西欧哲学とは別の仕方、すなわち内在性に還元できない仕方、「人間」の存在形式を思考してきた東アジアの伝統が貢献できるのではないかと述べる。無論、この「共生」の存在形式を有した「人類」はこれまで実在してきたわけではない。しかし、哲学は、来るべき「人類」を実在するものとして構想しなければならないし、さらには来るべき「人類」に対して全面的な責任を負わなければならない。そのためには、「共生」に向かって倫理的な決断をするだけでなく、政治的な決断をする必要がある。

それを受けて、佐藤将之（台湾大学哲学系）は、「作為共生理念之基礎價值的荀子「禮」概念〔共生理念の基礎価値としての荀子の「礼」概念〕という題のもと、東アジアの伝統において構想されてきた「共生」の存在形式について報告した。すなわち、近代日本において唱えられてきた「共生」概念を系譜学的に辿り直しながら、そこにおいて触れられた中国的な「共生」概念を整理し、その典型例として荀子の礼論（とりわけ「礼治」）を取り上げたのである。

三番目の論文は、中島隆博 (UTCP) による「否定政治學與共生哲學——西田幾多郎與新儒家〔否定政治学と共生哲学——西田幾多郎と新儒家〕」である。これは、近代日本を代表する哲学者である西田幾多郎と、中国・香港・台湾で活躍した新儒家と呼ばれる哲学者たち（熊十力、梁漱溟、牟宗三）の言説を取り上げ、哲学と政治の関係について論じたものである。哲学が他者との共生を問題にする際、哲学にとって政治とは何かが問われるべきであるが、近代東アジアの思弁哲学が構想しえたのは、自己否定・自己無化に基づく否定政治学であり、その結果、現実をそのまま高次の政治秩序と見るに至ってしまった。こうした現状肯定に陥った思弁哲学に対して、共生哲学は現状に対する根底的な批判によって、現状には存在しない、来るべき政治的な秩序を構想するものであると論じた。

第2部は、「共生」概念を歴史学から検討した UTCP シンポジウム「人類・歴史・共生——21世紀における「歴史学」の課題」（2009年4月11日）の記録である。羽田正、橋本毅彦、小林康夫、中島隆博の四人の事業推進担当者をパネリストとし、信原幸弘、原和之、村松真理子の三人の事業推進担当者をディスカッサントとして開催されたものである。

「世俗化・宗教・国家」プログラムの責任者でもあり、イスラーム理解講座のコーディネーターでもある羽田正から、冒頭において問題提起がなされ、「世界市民」が共有できる「新しい世界史」すなわち「共生の世界史」の必要性が論じられた。羽田は近代歴史学を系譜学的に辿りながら、「私たちの歴史」と「彼らの歴史」を区別してきたその歴史叙述を批判的に検討する。その上で、日本における歴史叙述が、日本史、西洋史、東洋史という三つの空間に分割されていることを指摘し、その分割を乗り越えた「世界史」を書くべきだと主張する。それには、都合よく恣意的に編成されてきたヨーロッパ中心史観を払拭する必要があり、その手始めに、ヨーロッパとアジアを一つにしたユーラシア史を英語と日本語で書くことを提案する。それは「共生の世界史」への第一歩にほかならない。

それに対して、小林康夫からは、「共生の世界史」を叙述する新しい方法は何であるのかという問いが出された。なぜなら、「共生の世界史」は

「移動」を叙述の対象とすることになるだろうが、近代歴史学のナショナルな歴史叙述では、それを十分にとらえる方法にならないと考えられるからである。また、中島隆博からは、「共生の世界史」が前近代の中国の世界史叙述とどこで区別されるのか、また戦前の「世界史の哲学」との違いは何であるのかという問いが出された。その後の討議において、浮かび上がってきたのは、科学を「共生の世界史」はどう扱えばよいかという問題である。

それを受けて、科学史と技術史を専門にする橋本毅彦は、ヨーロッパのパワーの核にある近代科学が18世紀、19世紀になって大きく変貌し、科学と結びついた技術革新がなされ、それが世界を統一的に支配していく武器になったことを述べた。その上で、世界史の主語になるのは、たとえば、科学技術を用いてアフリカを征服したいという非常に強い意図を持っていたヨーロッパ人でしかなく、抽象的な一般者を立てることはできないのではないかと指摘した。

その後の討議では、「共生の世界史」を書く主体が大きな焦点となり、小林が最後にまとめて、「世界市民だから書くのではなくて、世界市民というコンセプトが主体ではない主体を可能にすることを実証するためにこそ歴史は書かれなければならない」と締めくくった。

第3部は、UTCPが継続的に行ってきたイスラーム理解講座から、カリーム・ダグラス・S・クロウ（シンガポール南洋理工大学S.ラジャラトナム国際研究院〔当時〕）“ISLAM: Image and Realities [現代のムスリム——イメージと現実]”（2007年12月19日）を採録した。

クロウは、オリエンタリズム的な見方（性的な奔放さやテロリズム）を越えて、現実のイスラーム世界のあり方を正確に理解することが必要だと述べる。その一つとして、まず論じられたのがイスラームの歴史である。預言者ムハマンドによるイスラーム共同体の創設から、その後の多様な宗派の形成、そして現在のシーア派やスンナ派といった主流宗派とワッハーブ派やスーフィズムといった改革運動や神秘主義への流れが簡潔に辿られた。それと並行して、イスラームの学問の蓄積がヨーロッパ世界に先進的

学問をもたらすことになった歴史的事実も指摘された。

次に、欧米によるイスラーム認識の偏りについての批判がなされた。すなわち、「イスラーム世界」＝「アラブ世界」と一枚岩に捉えているが、内実はまったく異なり、アラブ世界のなかにはユダヤ教共同体とキリスト教共同体が存在するという、混淆の歴史と文化があるし、イスラームは今や東方へと広がり、中央アジア諸国や南アジア諸国、東南アジア諸国、中国などでムスリム共同体が大きくなっており、イスラーム世界はますます多様化してきている。

とはいえ、イスラーム世界の文化的多様性と豊饒性の傍らには、欧米世界による植民地支配の甚大な影響があり、脱植民地の過程で膨大な犠牲者を出し、そのことがなお後遺症となっていることを忘れるわけにはいかない。そのために、現在でもなおコロニアル・レジーム（植民地体制）的な政治制度が残っており、それがイスラーム世界には民主主義がないといったイメージを醸成している。実際のイスラーム社会においては、世俗化と宗教化の緊張関係や、ムスリム女性の社会進出に対する両義的な反応があり、決して単純に「遅れた」社会と見ることはできない。

必要なことは、イスラーム世界に対する欧米的な偏りのある見方を批判しながら、イスラーム世界の現実を他の文明や文化と比較しながら冷静に見つめ、いかにして「共生」していくのか、その手掛かりを見いだすことである。

第4部は、2008年10月6日～8日にかけて、アルゼンチン国立図書館で開催された国際シンポジウム「大学の哲学 合理性の争い」において、小林康夫が発表した「Être responsable de tout face à la crise de la pensée de l'homme [すべてに対する責任、人間の思考の危機にあって]」である。

小林は「システムの思考」がいまや「意味の思考」を凌駕し、これまで自然言語の個人的な使用に繋ぎ止められていた思考の能力を超えて、世界の様々な問いを解明するに至ったと言う。しかし、それに対して「人間の思考」は、「システムの思考」に吸収されたままにはならない「責任」において、意味の限界を目指し、それを語ろうとする。というのも、人間に

は、語り、そこから考えるという根本的な事実があるからだ。そして、人間は、存在しないもの、失われたもの、これから生じるもの、不可能なものなど「すべてを語る」。この点で、「責任」は人間への責任に限定されるものではなく、非人間的な存在や事象に対しても負われるべきものである。したがって、「人間の思考」に基づく人文学は、人間が非人間的な存在も含めた多様な存在と「共生」するための可能性の条件を提示するものでなければならない。そして、この観点は台湾大学での小林の基調講演にまっすぐ伸びていくものである。

以上の諸論考は、いずれも、「共生」概念を今日的な文脈において検討したものであり、今後のさらなる展開が期待される。しかも、日本語のみならず、中国語、英語、フランス語という多言語によって発表されていることから、「共生」概念の練り上げが国際的な環境で行われていることが見て取れるだろう。言うまでもなく、複数の言語で語ることもまた、「共生の哲学」にとっては必要不可欠な条件なのである。